

特集を組むにあたって

飯尾 秀幸

専修大学社会知性開発研究センターに設置された古代東ユーラシア研究センターの研究プロジェクトは、2014年に文部科学省「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」として採択され、5年間の研究をスタートさせた。今年はその5年目、最終年度である。この間、本センターに対して多方面から多大のご支援・ご協力をいただいたことに、先ずもってお礼を申し上げたい。5年間に実施した研究・調査、ならびにシンポジウムの積み重ねによって、古代東ユーラシア研究センターがこのテーマにおける研究拠点の一つになってきたと感謝している。なお、この5年間の活動記録については、「5年間の研究活動を振り返って」と題して本号巻末に掲載したので参照願いたい。

本研究プロジェクトでは、前号までの本欄で幾度となく記述してきたが、前プロジェクトである東アジア世界史研究センターの研究成果を引き継ぎ、それを土台として新たな課題である東ユーラシア地域論を提起した。それは前センターでの研究において、古代東アジア世界内における諸地域のそれぞれの歴史的展開が、東アジア地域の動向のみでは叙述できないという問題意識が生じたためであった。前センターにおいて、東アジア世界の歴史は中国を中心とした権力構造をもって展開されたとはいえ、その世界の形成を主体的に希求したのは、中国ではなく、むしろその周縁に位置していた朝鮮半島・日本列島に存在した諸権力の側であるという論点が主張された。これまで東アジア世界史論は、中国を中心とするヒエラルキーをともなった権力構造として制度史的に理解されてきた。静態的ともいふべきこの理解に対しては、多くの疑問も提出されていた。これに対して、上述した前センターにおける論点は、東アジア世界内における各地域の諸権力に主体性を与えることとなり、それが東アジア世界史論に対する一つの新たな有効性を与えることになったと自己評価している。

とはいえ東アジア世界の形成を主体的に希求した朝鮮半島・日本列島の歴史は、中国の影響を強く受けて東アジア世界という一つの世界の歴史的展開のなかにあったのであり、逆に朝鮮半島・日本列島の歴史が中心となって中国の、あるいは東アジア世界の歴史を展開したわけではないことも事実である。東アジア世界の歴史的展開に大きな役割を果たした中国の歴史を説明するには、東アジア世界とは異なった世界を形成していた内陸アジア世界、北アジア世界と中国との関係が中心となることも事実である。こうした諸事実から、東アジア世界の歴史的展開は、中国史中心史観に与することなく、東アジア世界に内陸アジア世界、北アジア世界を含めた東ユーラシアという地域を設定して叙述する方法が求められているとの問題意識が芽生えた。これが、本センターがこの課題に対して研究方法を提示し、その方法に基づいた具体的な歴史的事実を明らかにすることを目的とした所以である。

本センターでは本誌2号（2016年3月発行）において、その研究方法の理念である「中心と周縁」を提示し、それ以降はその理念の具体化を進めてきた。その成果はこれまで発行した4号までの『年報』に掲載されている。本誌5号は、この課題に継続して取り組んだ今年度（2018年度）の研究成果である。

本号は、2018年度に開催された第1回（通算第8回）と第2回（通算第9回）のシンポジウムにおける報告と討論を中心に構成されている。第1回のシンポジウムは、7月14日に「古代東ユーラシアの国際関係と人流」と題して開催された。關尾史郎氏は、4～5世紀における漢族の西方への移住の実態を、墓葬の形式という中央アジアにおける考古学の成果に基づいて明らかにし、その移住の背景として中国の動乱との関係を文献史料から論述した。荒川正晴氏は東ユーラシアにおけるソグド人による東西交易の実態を、香木の流通ルートを中心に検討し、東ユーラシア内での「人流」の具体的なあり方を議論した。成正鏞氏は、考古学の成果から朝鮮半島（馬韓・百濟王権）の人々と中国南朝との交流の実態を明らかにし、そのうえで当該地域間の人々の移動を考察した。これらの報告は本センターにおける「中心と周縁」という論点の具体化であり、東ユーラシア地域における東西の「人流」の実態に迫る研究として位置づけられる。

11月17日に「東ユーラシア地域論の現在－交流・交易からみた北と南－」と題して行なわれた第2回シンポジウムでは、新津健一郎氏がベトナム北部の交州地域社会の形成過程とその特徴から、中国と交州、および交州社会内部における重層的関係を明らかにした。菊池百里子氏は13～14世紀におけるベトナムの交易活動の実態を検討し、ベトナム北部・中部やインドシナ半島内陸部、さらには東南アジア島嶼部との関係を論じた。養島栄紀氏は、9～12世紀におけるアイヌによる北方地域の交易活動の実態を検討し、東北地方、および畿内との関係、オホーツクや大陸との関係などを議論した。高橋昌明氏は、12世紀の平家政権による宋との交易活動の実態、ならびに貿易港の整備にあられる政治的・経済的意義を追究した。これらの報告は、「中心と周縁」関係の重層的なあり方という論点の具体化であり、東ユーラシア地域東岸における南北の「人流」の存在とその実態を明らかにした研究として位置づけられる。

本プロジェクトの最終年度の研究は、東ユーラシア地域における東西、ならびに南北の人・モノの交流に焦点をあて、各地域間に存在した「中心と周縁」の重層的、複合的關係の具体的な解明を目指したものと総括することができる。討論を含めて検討いただければ幸いである。

本プロジェクトにおける研究成果の公表手段の一つである『年報』は、本号の5号でもって最後となる。前プロジェクトである東アジア世界史研究センターとともに本センターが、東アジア世界史論ならびに東ユーラシア地域論を研究する際の拠点としてようやく機能するようになったと自負している。しかし通算で12年間にわたる前センターと本センターのプロジェクトとしての発信はこれで終了する。本プロジェクトで提起した研究の視点に基づいた具体的な歴史学研究は緒についたばかりともいえ、残された問題、あるいは新たに発見された課題も多い。いま、これらの議論を継続して行なう場を、私たちはなんとか確保しようと考えている。本プロジェクトを閉じるにあたって、この私たちの「思い」を最後に表明して筆を置くことにする。

本プロジェクトの5年間の活動に携わっていただいたすべての皆様に、本センターの研究員・事務員一同あらためて衷心より感謝申し上げます。